

# 万国博覧会を活用した歴史の授業 —1862年第2回ロンドン万国博覧会を教材として—

History class using the World's Fair  
—The International Exhibition of 1862, London as the teaching materials—

楠元町子

KUSUMOTO Machiko

キーワード：第2回ロンドン万国博覧会、歴史の授業、展示品

## 1. はじめに

21世紀に入り、グローバル化の進展や人工知能（AI）の飛躍的な進化など、社会は加速度的に変化している。次期学習指導要領（2020年）は、2030年の社会で生きる子どもたちに育成すべき力として、「日本のこととグローバルなことの双方を相互的に捉えながら、社会の中で自ら問題を発見し解決していくことができるよう、自国と世界の歴史を広い視野から考える力」<sup>1)</sup>を挙げている。

高等学校では、世界史必修を見直し共通必修履修科目として、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者を育成するために、世界とその中における日本を広く相互的な視野から捉えて、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察する「歴史総合（仮称）」を設定することになった。

小学校・中学校の社会科の歴史分野では「我が国の歴史的事象に間接的な影響を与えた世界の歴史を充実させる。」<sup>2)</sup>とある。小学校、中学校、高等学校の歴史教育においては、日本を世界の歴史の中で捉え直し、考察する力の育成が求められている。

世界と日本を相互的な視野から考える近代史の教材として、19世紀中頃から世界各地で開催された万国博覧会を活用した授業を提案したい。万国博覧会は、イギリスが1851（嘉永4）年に「全世界の工業の大博覧会」(The Great Exhibition Industry of All Nation)と銘打って、ロンドンで初めて開催された。その後フランス、アメリカ合衆国、日本、中国など世界各国で開催され、万国博覧会は産業技術の成果だけでなく、各国の文化の多様性も表現する空間であり、その時代の世界像、国際関係を反映する場でもあった。

特に日本の展示品が初めて万国博覧会の会場に展示された1862（文久2）年第2回ロンドン万国博覧会に着目する。1862（文久2）年は、日本では幕末の混乱期であり、米国は南北戦争中、ロシアはクリミア戦争敗北後など世界の転換期であり、「博覧会とは、その透明な分類学的秩序のうちに、地球上で『発見』されるすべてを記号として配列していくまなざしの空間である。」<sup>3)</sup>以上、万国博覧会の資料を検討することで当時の世界を具体的に理解できると考える。

第2回ロンドン万国博覧会は、「芸術も産業も進歩したこの時代、芸術と武器が実際、同一歩調をとっているというのが事実である。博覧会は世界の縮図であり、人類の産業と技能の痕跡のすべてが、いくつかの大まかな項目に分類されて、ここに展示されている。」<sup>4</sup> のであり、第1次グローバル化の時代の世界を俯瞰する優れた教材であると考えられる。

第2回ロンドン万国博覧会に関する主なる研究としては、日本製品出品の経緯とオールコックの万博との関わりを詳しく論じた佐野真由子の著作『オールコックの江戸』、万博会場での文久遣欧使節団の行動と英国での評価を明らかにした松村昌家の論文「一八六二年ロンドン万博会場の幕末使節団」<sup>5</sup> などがある。

本稿では、これらの貴重な研究を踏まえ、1862年に開催された第2回ロンドン万国博覧会の『公式図解カタログ』、当時の英国の新聞や雑誌記事、文久遣欧使節団の資料等を考察することで、英国、米国、フランス、ロシア、日本の展示物を明らかにする。万国博覧会の資料を考察することで、1862（文久2）年の世界と日本の状況を理解し、当時の世界を具体的にイメージできる授業を提案したい。

## 2. 万国博覧会と歴史の授業

### 1) 次期学習指導要領（2020年）と歴史の授業

現行学習指導要領の課題<sup>7</sup>として、資料から読み取った情報を基にして社会的事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり多面的・多角的に考察したりして表現する力の育成が不十分であることが指摘されている。また、小学校社会科では、指導している内容が社会科全体においてどのような位置付けにあるか、中学校社会科とどのようにつながるかといったことを意識しづらいという点が課題として指摘されている。

そのことを踏まえ、次期学習指導要領では以下のように改善することになった。小・中学校社会科の内容を、①地理的環境と人々の生活、②歴史と人々の生活、③現代社会の仕組みや働きと人々の生活という三つの枠組みに位置付ける。また、①、②は空間的な広がりや念頭に地域、日本、世界と、③は社会的事象について経済・産業、政治及び国際関係と、対象を区分する<sup>8</sup>。歴史分野では、「我が国の歴史的な事象に間接的な影響を与えた世界の歴史を充実させる。」<sup>9</sup> とある。

高等学校「地理歴史科」では、共通必修履修科目として「歴史総合（仮称）」「地理総合（仮称）」選択必修履修科目として「世界史探求（仮称）」「日本史探求（仮称）」「地理探求（仮称）」の設置が予定されている。共通必修履修科目である「歴史総合（仮称）」については、①世界とその中における日本を広く相互的な視野から捉えて、近現代の歴史を理解する科目、②歴史の推移や変化を踏まえ、課題の解決を視野に入れて、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察する科目、③歴史の大きな転換に着目し、単元の基軸となる問いを設け、資料を活用しながら、歴史の学び方（「類似・差異」、「因果関係」に着目する等）を習得する科目としている<sup>10</sup>。

文部科学省は、「歴史総合（仮称）」の授業展開について次のように提案している<sup>11</sup>。現代的

な諸課題の形成に関わる近現代を学ぶ意義や歴史の学び方を考察させ、近現代の歴史の大きな転換（「近代化」、「大衆化」、「グローバル化」）に着目させる構成が適当である。その際、「近代化」では、近代化の前の各地域の状況（例えば、アジアを舞台とする日本と世界の商業や交易など）について触れ導入とし、産業社会と国民国家の形成を背景として人々の生活や社会の在り方が変化したことを扱い、「大衆化」では、大衆の社会参加の拡大を背景として人々の生活や社会、国際関係の在り方が変化したことを扱い、「グローバル化」では、グローバル化する国際社会を背景として人々の生活や社会、国際関係の在り方が変化したことを扱い、世界とそこにおける日本を広く相互的な視野から捉えて、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察させるという構成が適当である。

「しかし、難問は、先生たちが適切な『なぜ』を仕掛けられるか、知識と思考のバランスをうまく取れるかである。これは、相当な力量が問われるだろう。」<sup>12</sup>と指摘されるように、教材開発が重要であると考え。児童生徒に興味を抱かせ、多面的な資料を読むことで、世界とそこにおける日本を具体的に捉える教材として、万国博覧会を取り上げたい。

## 2) 歴史の授業の教材としての万国博覧会

1851年（嘉永4）年イギリスの首都ロンドンで「全人類が現在までに到達した技術、産業、文化を示す。」<sup>13</sup>という主旨の下に、万国博覧会（以後万博）が世界で初めて開催された。博覧会は18世紀後半にフランスが、産業技術の発展を目的に国内の生産品を展示したことに始まった。しかし博覧会が国内博覧会から万国博覧会に移行し、世界中のあらゆるものを集め展示することにより、博覧会は産業技術の成果だけでなく、各国の文化の多様性も表現する空間となった。入場者は会場内を歩くことにより、各国の産物に象徴された「世界」を一周し、異文化を体験することが出来たのである。

第1回ロンドン万博の大成功に刺激され、万博は1853（嘉永6）年にはニューヨークで開催された。1855（安政2）年のパリ万博においては、美術品のための専用の展示館を新設するなど、万博は規模を拡大しながら、19世紀後半から20世紀にかけて先進諸国で次々と開催された。

万博は、パリ、ニューヨーク、ウィーン、メルボルンなど世界各国の都市で開かれ、日露戦争中に開かれた1904（明治37）年セントルイス万博や、ピカソの「ゲルニカ」が展示された1937（昭和12）年パリ万博のようにその時代を象徴的に表している万博も多くある。その中でも日本の展示品が初めて万博の会場に展示された1862（文久2）年第2回ロンドン万博に着目したい。

ロンドンで万博が初めて開かれた2年後1853（嘉永6）年、鎖国体制を取っていた日本に、ペリー（*Matthew Calbraith Perry*, 1794-1858年）が来航し、開国を迫った。日本は日米和親条約を結び、世界に向けて交流を開始したのである。1862（文久2）年第2回ロンドン万博では、江戸幕府が正式に展示物を送ったのではなく、駐日英国公使オールコック（*Sir Rutherford Alcock*, 1809-1897年）が収集した品物を主にロンドンに送った。「日本の実情は

ほとんど知られていなかった当時あっては、万国博の出品物はそれぞれの国の文化の性格を察知する重要な資料であり、キイであった。』<sup>14</sup>

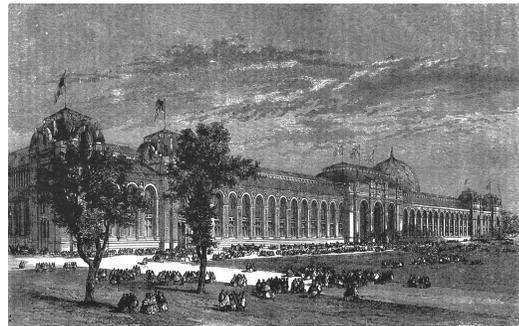
第2回ロンドン万博において日本の展示物以上に英国で注目されたのが、万博会場に姿を現した開港・開市の延期を求めて欧州に派遣された文久遣欧使節団であった。日本は欧州の人々に初めて展示された物と派遣された人の両方から見られ、日本のイメージが形成されたのである。また同時に文久遣欧使節団も万博会場を見学することで、世界の進歩を知るとともに新たな知見を得、日本の近代化に貢献したのである。

万博の会場は、その時代の文化、産業を一同に展示することにより、世界を俯瞰する装置でもあった。時代の転換点ともいえる時期に開催された万博は、世界各国の歴史的状況を具体的にみる事が出来る優れた教材であると考えられる。

### 3. 1862（文久2）年第2回ロンドン万博（1862年ロンドン国際博覧会）

#### 1) 万博の概要

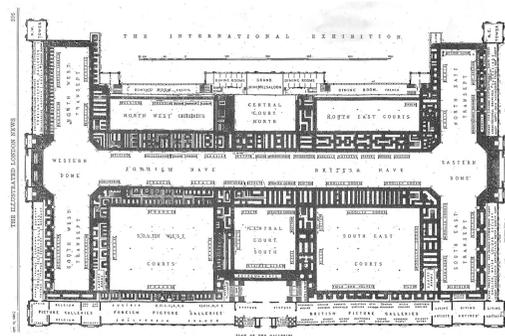
第2回ロンドン万博(The International Exhibition of 1862, London) (図1、2)は、会場はサウスケンジントンにある王立園芸協会庭園の隣接地、会期は1862（文久2）年5月1日～11月15日、入場者数は約621万人、展示会場の面積は23エーカー、会費は45万ポンド<sup>15</sup>、参加国は、フランス、ロシア、スペイン、スウェーデン、アメリカ合衆国、ブラジルなど合わせて39カ国であった。イギリスは、インド、セイロン、オーストラリア、カナダ、アフリカ、西インド諸島等、30を超える植民地の諸地域の資源と生産物を展示した。



(図1 THE INTERNATIONAL EXHIBITION BUILDING)

万博展示会場において、展示品は大きく3つに分けられ、美術品を展示するために特別に設置されたギャラリーに美術品、本館と東館に原料、製品および農機具、西館に蒸気や水力を必要とする機械類を配置した<sup>16</sup>。

建物内の展示スペースは、英国の出展者と外国の出展者とで等しく半々に分けられ、英国の植民地は、英国側のスペースの一角を占めていた。産業関係の展示部分は、原料、機械類、製品という一般項目のもとで、36のクラスに分けられ、出展者は23,500人であった。1851（嘉永4）年と比較して英国からの出展者は減少したが外国の出展者は3倍に増



(図2 PLAN OF THE GALLERIES)

えていた<sup>17</sup>。キャッセル社の家庭新聞は、万博会場の展示品について次のように絶賛している<sup>18</sup>。「美術展示も産業展示も大規模かつ広範囲で、極めて興味深い。実際、これほど素晴らしく、これほど完全な展示は、これまで見たことがない。この建物の半分を占める外国の展示では、欧州のあらゆる国から、また、地球上の地区を問わず文明の中心地のほとんどから、代表が送られている。」その様子が如実に表れたのが、5月1日の開会式とその後行われたピクチャー・ギャラリーズの大打進であった。

## 2) 5月1日の開会式とピクチャー・ギャラリーズの大打進

5月1日の開会式は華やかさとイギリス王室の威光を尽くして、日本から遣欧使節団を含む多くの賓客を招いて次のように行われた<sup>19</sup>。王族、貴族、国家、教会、警察、および国の科学部門・芸術部門・文学部門・商業部門・産業部門のすべての代表者が出席した。諸外国に関しては1851（嘉永4）年の第1回博覧会より、この1862（文久2）年の第2回博覧会の方が、欧州などの名士が多く出席していた。発光するヘルメット、光輝く宝石類、豪華なローブ、独特な衣装、羽根飾り、星模様、十字模様、こうしたきらびやかなファッションのすべてが良い印象となり、音楽の魅力や、若さ・美しさ・上品さによる影響を加えれば、開会式が群衆の心に長く残る出来事であったことは想像するに難くない。

開会式典後に行われたピクチャー・ギャラリーズの大打進の印象について、*The Illustrated London News* は5月10日の記事で次のように述べている<sup>20</sup>。我々は行列のすぐ近くまで来て、全身をアルバニアの衣装に包んだ人物を見て度肝を抜かれた。ピロードと金のジャケット、純白のキルト、刺繍でこわばったサッシュ、レギンス、スカルキャップという出で立ちで、我々は最初、バイロン卿の海賊、オソン1世、ヤニナのアリ・パシャのいずれかと推測したが、イオニア諸島の管理官ドラモンド・ウルフであることが判明した。次に、日本の特使の服にほとんど手が触れる位置まで来た。この面白い異国人たちは、皇帝ナポレオンに仕えるときに身に着けるような、高位を表す金布のローブをなぜ着て来なかったのか不思議である。率直に言って、彼らの衣装は、一般に「みすばらしい」と呼ばれる種類のものであった。6人の中年の一行が、半分刈った頭で、薄汚れた上着、言葉で言い表せない茶色の袴、そしてペイパーブーツを身に着けている光景は、我々が持つ「貴人」のイメージにはびったり当てはまらなかった。しかし、こうした特使たちが各自2本ずつ持っていた「財産」の刀は、素晴らしく見えた。

ピクチャー・ギャラリーズは、ルーブル美術館の長いギャラリーを含めても、現存するものとして、最も広々とした見事なものであることは確かである。その照明も、期待し得るかぎりの功を奏しており、この機会と一緒に展示される英国の美術品のコレクションも、既知のものより立派である。どの部門においても、英国の展示は競争手を凌いでいる<sup>21</sup>。

英国の展示は、軍事大国としての武器の展示や錚々たる機械展示など黄金時代を世界に印象付けた。

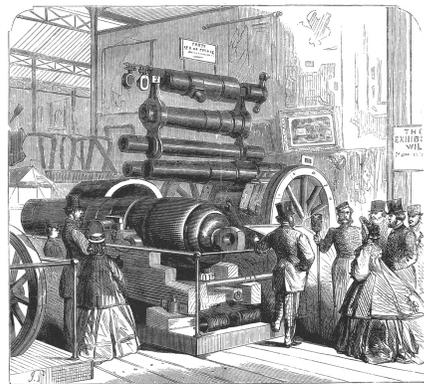
### 3) サウスケンジントン・パレスの武器と軍需品の展示

1862（文久2）年万博会場では小型兵器（図3）とアームストロング砲（図4）の2種のトロフィが組み立てられて、会場を訪れた人々の目を引いていた。兵器トロフィとは、古代の戦勝記念碑になぞらえて兵器を組み立てた構造体であった。小型兵器トロフィは、マスケット銃やライフル銃、銃剣、軍刀などによって構成される。小型兵器トロフィと対をなす形で設置されたのがアームストロング砲トロフィで、「百ポンド砲、十二ポンド、九ポンド砲を組み合わせる構築されたこのトロフィは兵器展示場の中央にあって最も際立ち、そして最も興味深い展示物のひとつ」<sup>22</sup>であった。その他にスポーツ銃は多種多様なものが展示され、その多くは目新しい構造のもので、上品な細工が施されている<sup>23</sup>。

イギリスが誇る最新兵器として大変な期待が持たれたアームストロング砲は、1858（安政5）年にイギリス軍の制式砲に採用されている。幕末の日本にも大きな影響を与えたと思われる。「1868年の戊辰戦争に、アームストロング砲が登場するようになる。その行程を考えると、薩摩藩士の松木弘安（のちの寺島宗則）と、石黒寛次、岡鹿之助、川崎道民ら三人の佐賀藩士が使節団に加わっていたことに注意を向けておく必要がある。佐賀藩は、1864年にはじめて後込め式アームストロング砲の製造に成功した。」<sup>24</sup>



（図3 THE SMALL ARMS TROPHY IN THE BRITISH NEVE）



（図4 THE ARMSTRONG GUN TROPHY）

### 4) 西館の機械の展示

「西館で見られる錚々たる機械展示を一瞥すれば、1851（嘉永4）年以降の短い期間にさえ進歩があったことに感銘を受けざるを得ない。これは、出展者の数と卓越した展示見本を見れば明らかであり、いずれも英国人と外国人によるものである。」<sup>25</sup>この区間は、展示品が重くて扱にくいいため、多大な労力と困難を伴ったが、出展者はどの品も出来るだけ完璧な状態にしようと非常に真剣に取り組み、極めて質の高い展示が見られた。

西館では、機械を運転している状態で展示したものがあり、多くの観覧者の好奇心を満たした。観覧者は冷たい鉄の削りくずが砲の下でリボンのように丸まって出てくる様子、鉄の薄片がチーズのように削り取られる様子やドリルから鉄粉が大量のおがくずの様に落ちていく様子を直接見ることによって機械のあらゆる部分がいかに易々と、きっちり規則正しく仕事をしているか

を確かめることが出来た。人々は機械化が急速に進行している社会の最新の知識を得るには、「世界で最高の学校であるこの博覧会に行かなければならない。」<sup>26</sup>

19世紀中頃のイギリスは、「世界の石炭の60%、鉄と綿製品の50%、金属製品の40%をそれぞれ生産し、世界貿易における製造品輸出ではその40%を掌握していた。世界の商船の30%はイギリス船であった。世界の人口の2%、ヨーロッパ人口の10%を占めるにすぎないイギリスが、世界の生産能力の40%以上を、ヨーロッパのその60%を占有していた。（中略）まさに『世界の工場』『黄金時代』『大繁栄のヴィクトリア時代』などと称されるにふさわしい時代であった。」<sup>27</sup>

他の国々は、イギリスに対抗するため、工業化を進める必要に迫られた。ベルギー、フランスは19世紀前半に、ドイツは関税同盟によって経済的統一が進められた1830年代から、アメリカ合衆国は1810年米英戦争の頃から機械化が進み、南北戦争後産業革命が本格化した。ロシアは農奴解放後の1880年代から、日本も明治維新後19世紀末から国家による産業革命が推進された。

万国博覧会における各国の展示品は、まさに産業革命の進行とその国の政治経済状況を如実に表していたのである。

#### 4. 第2回万国博覧会の各国の展示品と万国博覧会の意義

##### 1) 日本の展示品

オールコックが短期間で収集し第2回ロンドン万博に送った日本製品623点は、A～Iの9つに分類され、1から623の番号を振られ、『1862年ロンドン万博公式図解カタログ』に記載された。日本の展示品は次のようであった<sup>28</sup>。

A(1～238) : 漆器の見本、木に漆を塗ったもの、漆と象眼を施した木、貝殻類、鼈甲

B(239～297) : 藁および籠細工の見本

C(298～383) : 磁器や陶器の見本（江戸や横浜から）

D(384～517) : 青銅製品と金属

E(518～536) : 紙一紙の原料、壁紙、筆記用の紙、紙のハンカチ、包装用の紙、擬革紙

F(537～556) : 織物一縮緬、各種の絹、綴れ織、綿の更紗各種、樹皮で作った織物

G(557～572A) : 美術作品—象牙の彫刻、木彫り、絵画、挿し絵、版画

H(573～603) : 教育用の作品や器具科学関係の本、ヨーロッパ的模型と楽器、玩具

I(604～623) : その他、外国人や日本人が個人で提供した製品

ヴィクトリア朝のペニー週刊新聞として当時人気があった「キャッセル社絵入り家庭新聞」(*Cassell's Illustrated Family Papers Exhibitor*)の「1862年国際博覧会特集」では、和紙について、「紙レザーの中には、皮なめし工場から出てきた皮革と同じくらい強さがあるように見えるものもある。」<sup>29</sup> また衣装を締める用途の小さい金属製バックルの素晴らしいコレクションについて、「その中にはたまたま奇奇怪怪なデザインのものがあり、リーチ氏がパンチ誌

に連載を始めた当初の小さくて黒い木版画を彷彿とさせる。』<sup>30</sup> これらを見ると日本人一般の氣質が広範な風刺的諧謔に傾倒していることが分かり、英国のリーチ(Jon Leech 1817-1864年、風刺画家)のような人が、日本には数百人はいるに違いないと称賛している。

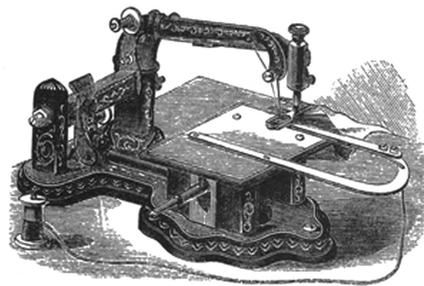
「青銅をインクスタンドやたばこ入れ、燭台など日常的な家庭用品に適合させる上で、素晴らしい創意工夫が示されている。』<sup>31</sup> と指摘されたように、箆筒、根付、和紙製品、陶磁器など日常生活で使用している物の技術力、デザイン性が欧州では高く評価された。一方、万博会場を訪れた遣欧使節団員は、機械や大砲など高い技術力を示す西欧の展示品と日用品がほとんどであった日本の展示品を比較し、恥ずかしく感じたようであった<sup>32</sup>。

日本の展示は、日本人は日用品ばかりで恥ずかしいと思ったが、英国人からは劣品でありデザイン性が高く優れた技術を持っていると評価された。

## 2) アメリカの展示品

アメリカは、1861(文久1)年から南北戦争が戦われており、そのため展示は小規模で不完全であったが、米国からの約70の出展者で行われた展示は次のようであった<sup>33</sup>。来場者は、アメリカ区画に入ると、マコーミック氏による刈取機や、他の器具類を見て感銘を受ける。ニューヨーク州にあるウェストファームズのスミス氏は、「アクスマンスター・タフト織りパイル」として知られている種類のカーペットを織る力織機を展示している。ミシンや、ブーツ・靴製造機、その他の気の利いた小間物は、このアメリカ区画で好奇心をかき立てられた来訪者の記憶にもとどめられるだろう。綿畑で綿を摘むための機械も展示され、立派な熱素機関、カリフォルニアのポンプ、印刷機、水車・蒸気ポンプ・ポンピング機関のモデル、亜麻繊維を梳いて揃える機械もあった。こうした機械は西館に展示されていたが、アメリカ区画自体に様々な省力器具があり、じっくり見る価値が十分にあった。

ウィラー&ウィルソン商会による名高いロックステッチミシン(図5)については、公式カタログで次のように詳細に説明している<sup>34</sup>。「このロックステッチミシンは、ギャザーも、縁処理も、伏せ縫いも、縁飾りも、ステッチも、素晴らしい速さで行い、その縫い目には、完全な均整と美しさと耐久性がある。仕上がりは、手で縫った場合より強く、切ってもほつれない。家庭用にも、業務用にも適していて、シンプルで管理しやすいため、子どもでも使うことができる。」と実用的であることを強調している。



(図5 LOCK-CSTICH SEWING MACHNE)

主な大型機械類は、西館に展示されていた。1851(嘉永4)年に注目を集めたビグロー氏が発明した織機は運転している状態で西館に展示されており、来場者を驚かせていた。

アメリカの展示品は、小規模であるがミシンは素晴らしく、大型機械を運転している状態で

見せるなど、実用的な面で他国を圧倒していた。

### 3) ロシアの展示品

キャッセル社の家庭新聞は、「ロシアの展示品は世界におけるロシアの特徴、つまり政治面・道徳面・地理面での特徴が非常に強く出ていた。未熟な段階にあるのに気取って、世界で最も洗練された国を装っている。」と指摘し、展示品について次のように述べている<sup>35</sup>。ロシア区画は、きわめて素晴らしく、非常に興味深い物が多く展示されていた。持ち手が豪華な装飾で、表面に最も繊細な彫刻が施されていた直径が5フィートもある立派な壺や、高さ17フィートの枝付き



（図6 THE RUSSICAN COURT）

燭台があった。これらはシベリアで、完全に手作業により、こつこつと何年もかけて、完璧に仕上げられている。銀細工を施したカップや小像のコレクション、エカテリーナII世の巨大なブロンズ像もある。

ロシア帝国の姿を十分に表しているのは、あらゆる種類の穀物や鉱物の見事なコレクションである。皇室用製造所製の陶器、モザイク画、ガラスにマーブル・ペインティングや「ピエトラ・ドゥーラ」ペインティングが施された作品を集めた貴重なコレクションもある。その品物のほとんどは、実用的というより、豪華で装飾的なものではあるが、その出来栄と価値、美しさは滅多にないものである。

タバコとトムロコシ、絹とコーン、ボルガ川流域とドン川流域の平野で採れた小麦、シベリアからの毛皮と獣皮、麻、亜麻、皮革、油、獣脂、様々な種類の貴重な宝石、貴重ではないが非常に役立つ多くの石。これらすべてが相まって堂々とした展示となっている。

ロシアの8千万人の住民を代表する人々によって行われた産業展示の様々な興味深い物をじっくり見て回ると、全部で1時間かかるかもしれないが、有意義に過ごすことができる。さらにロシア美術部門には、いくつかの優れた絵画と彫刻がある。

ロシアは、豪華で装飾的なもの、大変な日数をかけた手作り品、豊富な資源、多種類の穀物などを展示していたが、近代的な機械類はあまりなかった。

### 4) フランスの展示品

訪れた多くの人を魅了したフランスの展示区画（図7）は、次のようであった<sup>36</sup>。驚嘆すべき豊かさと秩序があり、展示の評判を良くするための必要な配置、出品者自身の要求を完全に理解していることが感じられる。このフランス区画ではすべてのクラスが十分に満たされ、どのコレクションも上手く陳列され、それ自体で完全な一つの展覧を成している。

この区画で最も目立つ物は、大きな垂幕のように壁に掲げられ、あらゆる人の目を引き付け

る、ゴブラン織のタペストリーである。その色合いは豪華で、来場者はティツィアーノの荘厳な絵画「聖母被昇天」を再現した毛織物を、離れた位置からじっと眺める。その隣には、それほど大きくもなく、色もそれほど華やかではないが、ローブを纏った「ルイ14世」の肖像（肖像画を模したゴブリン織）がある。両側にある2つの見事な果物の作品は、ボーヴェで製作されたものである。



(図7 THE FRENCH COURT)

さらに金細工と銀細工の作品が、フランス国内のほとんどの最高級メーカーから出品されており、膨大な数の宝石類と、いわゆるパレ・ロワイヤルの宝飾品が展示されている。宝石・宝飾類ではM. Villemontが、銀製品では、Christofle、Debain、Odiot、Rudolphiが卓絶している。

フランスは、豪華な色合いのタペストリー、膨大な宝石類を展示していたが、何よりもその陳列方法が他国よりも群を抜いて優れており、現在のフランスを彷彿させる。

#### 5) 万国博覧会の意義—展示品から見る世界—

第2回ロンドン万博の展示品を見ると、日本は小さくても世界にない固有の文化を展示し、アメリカは機械化が進行している様子を展示し、ロシアは膨大な資源と豪華な展示品で国力を誇示し、フランスは独自の世界観で自国をアピールしていたことが分かる。

万博は、時代の最先端をゆく科学技術の展示を通して経済や文化の発展に貢献するとともに、開催国や参加国の国際関係を反映し、その時代の世界像を示す場でもあった。訪れた参観者にとっては、日常生活では経験したことのない国際色豊かな文化に直接触れる貴重な機会であった。まさに万博は、時代の一面を鮮やかに切り取って人々に閲覧させたのであり、万博に集まった人々はその時代の断面を視覚していたのである。

万博の展示品とそこに集まった人々の交流を考察することで、過去の世界を具体的に理解することが出来ると考える。

### 5. 授業実践「1862（文永2）年の世界と日本」

#### 1) 授業の目的と方法

「1862（文永2）年の世界と日本」の授業は、「社会科教育法I」の授業で2年生126名の学生を対象に行った。「社会科教育法I」は、小学校の社会科の授業方法を学ぶことを目的としており、学生のほとんどは将来小学校の教師を目指している。

小学6年生歴史の授業で1853（嘉永4）年ペリーの来航、1854（安政1）年日米和親条約と1858（安政5）年日米修好通商条約の締結を学習した後、1862（文久2）年第2回万国博覧会

の資料を考察することで、具体的に幕末の日本と世界の状況と万国博覧会の役割を理解することを目的として行った。

授業では、以下の資料を使用した。

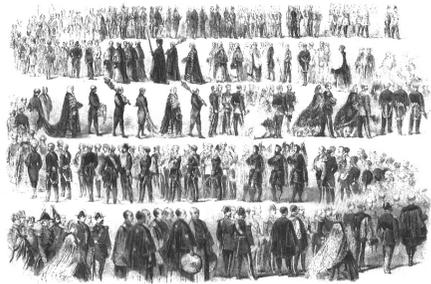
- ①文久遣欧使節団員（福沢諭吉、高島祐啓、澁辺徳蔵、市川渡）の日記。
- ②万博の開幕式に参列した文久遣欧使節団や当時の日本を紹介した *The Illustrated London News* の記事。
- ③ヴィクトリア朝のペニー週刊新聞として当時人気があった「キャッセル社絵入り家庭新聞」*Cassell's Illustrated Family Papers Exhibitor* の「1862年国際博覧会特集」の記事
- ④第2回ロンドン万博の公式カタログ

上記の②、③、④に掲載された万国博覧会開場の様子や展示品の絵を数多く見せることで、学生が具体的に1862（文永2）年の世界と日本の文化、技術、産業がいかに関わっていたか考えることが出来るようにした。

## 2) 授業の導入

授業の導入として学生の興味を引き、授業の目的である「1862年の世界と万国博覧会の役割の理解」へ繋げるため、1862年5月10日付 *THE Illustrated London News* に掲載され「ピクチャー・ギャラリーへの大行進」の絵(図8)を見せた。ピクチャー・ギャラリーズは、万博会場に設置された絵画展示場で、「クロムウェル・ロード（南）に面した建物の階上部分に建設された約350メートルの座敷全体を占める。中央入口に向かって右側がイギリス領、左側がフランス、ドイツ、オーストリア、オランダ、スペイン、イタリア、ロシア、スウェーデン、アメリカなど、18ヵ国から寄せられた作品展示のギャラリーになっていた。」<sup>37</sup>

5月1日に行われた博覧会開会式典に招かれた世界各国からの賓客たち（幕末遣欧使節団代表を含む）が、式典終了後ピクチャー・ギャラリーズへ大行列を行った。この大行列はまさに、「日本と西洋との交流の黎明期における歴史的なひとこまがここに見事に表象されている。」<sup>38</sup>



(図8 OPENING OF THE INTERNATIONAL EXHIBITION)



(図9 VIEW OF THE ENGLISH PICTURE-GALLERY)

## 6. 授業の展開と考察

1) 視覚的教材の読み取り—絵を見て考える—

①「イギリス人は文久遣欧使節団を見てどう思ったか。」

*The Illustrated London News* に掲載された万博会場の文久遣欧使節団の絵 (図10) を見せて考えさせた。学生の主な意見は次のようであった。

- ・変わった服装、ちょんまげに驚き、スカートみたいのをはいているな。
- ・頭を剃って、面白い髪形をしている背が小さい。
- ・黄色の肌で平たい顔、顔が怖そうで、性格も荒そうだ。
- ・刀を持っていてかっこいい。
- ・刀を持っていて怖い。
- ・不愛想なんか偉そうな服だな、態度だ。
- ・自分たちと違う文化を珍しく不思議なものだと感じた。



(図10 THE JAPANESE AMBASSADORS AT THE INTERNATIONAL EXHIBITION)

以上のように、華やかなドレス姿の西洋人の中で、その服装や髪形で注目を浴び「場違い」と思われる

一方、態度を「礼儀正しい」、刀から日本人をかっこいいと好印象を持ったのではないかと推測する学生もいた。

②「何を展示したと思いますか。」

「江戸時代の産業から考えてみましょう。」と、これまでの学習をもとに考えさせたため、次のように多くの品物が挙げられた。浮世絵、版画、屏風、掛け軸、壺、磁器、陶器、薬、大仏、鉄砲、鎧、冑、漆器、着物、茶道の道具、能面、和紙、折り紙、扇子、大判小判、地図、生糸、有田焼、西陣織など、日本の伝統工芸品、各地の特産物、現在でも日本が世界から評価されているものを考えていた。



(図11 THE JAPANESE COURT)

③「日本の展示品を見た感想」

*The Illustrated London News* に掲載された日本の展示コーナーの絵 (図11)、*Cassell's Illustrated Family Papers Exhibitor* に掲載されたイギリスの兵器や大砲 (図3、4)、アメリカのミシン (図5)、ロシアの展示品 (図6)、フランスの展示品 (図7) など他国の展示品を見せた。『公式カタログ』に掲載された日本の展示品623品目のリスト<sup>39</sup>を配布したため、展示品の多さに驚いた意見が多かった。学生の主な意見は次のようであった。

- ・小さな物が多く、ぎっしり置かれていて、とても見にくく感じた。
- ・実用品ばかり、興味を引くものがない、ごちゃごちゃしている。
- ・わびやさびを意識したラインナップで、欧州の人が見たら魅力を感じたのかな。
- ・日本を代表する展示品ばかりで、日本のことを宣伝するには良い。
- ・手先の器用な日本ならではの物もたくさんある。
- ・今でも日本の博物館に展示してありそうな物ばかりで興味あるものが多い。日本の当時の日用品から多く展示されていて、日本の暮らしを知ってもらうのに良かったのではないかな。外国人には遅れていると感じられてしまうような物ばかりでないかと感じた。
- ・日本地図や山、海の産物が展示されていることから、日本のことを知ってもらいたいという意図があるのではないかと感じた。

以上のように、日本の展示物を恥ずかしいと思う一方、日本らしさを評価し、日本のイメージを海外に知らせる良い機会であったと捉えた意見もあった。

## 2) 文章の資料の読み取り—資料を見て考える—

### ① 文久遣欧使節団員の日記—日本人は日本の展示をどう評価したか—

文久遣欧使節団員として万博会場を視察した福沢諭吉、高島祐啓、澁辺徳蔵、市川渡の日記を配布して、書かれた内容を読み取らせた。学生は次のように文久遣欧使節団の考えを捉えた。

- ・外国と比べると展示品は恥ずかしい骨董品や雑貨類であった。
- ・外国よりも珍しいものが多いけれど、日本は数が少なく、見劣りしていた。
- ・展示して欲しかったのは、日本の近代化を他国に知らしめるような物だったが、展示品は日常で使用するような備品ばかりで残念。
- ・幕府はもっと万博の意義を理解し、力を入れるべきで、輸出のために産業技術を駆使した製品や機械を出品すべきであるのに、骨董品や雑貨類ばかりで恥ずべきである。
- ・外国の機械などを用いる展示に比べ、日本は小細工物ばかりで数が少ない。元来の博覧は各国に自国の産物を知らせ輸出など貿易に発展させるべきであるのに、日本はそれを知らず産物を他に教えるのを拒み粗末な物ばかり出した。しかし漆器の精巧さは外国に類をみなく素晴らしかった。
- ・高島は、日本の品は外国にない独特のものが多いが、出展した数が多いと主張。福沢は品の種類が少ないと主張。澁辺は恥ずかしい品ばかり出展し、幕府の博覧会の意義の理解の低さを非難。一方、市川は多くの雑品のあるなかで、漆器の精巧さは日本が一番だと肯定的に見ている。

以上のように、学生は文久遣欧使節団員が日本の展示物の欠点を述べる一方、日本の外国製品にない良さや貿易の重要性に気づき、万博への幕府の取り組み方を批判するなど世界の情勢を正確に理解しようとしていたことに気付いたようだ。

②イギリスの雑誌や新聞記事—イギリスのメディアは日本をどう評価したか—

「キャッセル社絵入り家庭新聞」のJAPANについての記事、*THE Illustrated London News*の5月24日付A JOURNEY IN JAPANの記事を日本語に翻訳して配布した。学生の主な意見は次のようであった。

- ・日本人の職人の技は素晴らしく、材料の使い方が独創的である。
- ・独特な美しさや精巧な作りに感動した。
- ・欧州の人が全く分からない技術を日本人は発明していて、素晴らしい。
- ・日本人一般の気質が広範な風刺的諧謔に傾倒している、ユーモアがある。
- ・日本人でしか作れないものが多く、非常に高価な価値のある作品である。
- ・日本の絵、金属細工、紙類の評価は高い。
- ・素晴らしい、日本の国民の生活様子や奥深い技術が散りばめられている。
- ・奇抜でユーモアに富んだ製品がある。
- ・細やかな創意工夫がなされ、日本の職人の腕はかなり高い。

3) 絵と資料からの考察—万国博覧会の資料から幕末の日本と世界の状況を考える—

今まで見た万博会場の絵や展示品、配布した資料を総合的に考えるように指示して、以下の

①、②、③の問いに答えさせた。

①「イギリスはなぜ万国博覧会を開いたか。」

学生の主な意見は次のようであった。

- ・国力の高さを世界に知らせ、「イギリスは違う」「レベルが違う」と思わせたかった。
- ・他国の技術を見て、自国の職人を触発し、より高い技術を得ようとしているから。
- ・イギリスのスペースに植民地諸国の展示を入れ、この植民地はイギリスのものだとアピールするため。
- ・外国の技術力や経済力を展示物から知ろうとした。又、他国の良い製品や自国の国民が欲しがりそうなものを見つけて、貿易につなげようとした。
- ・イギリスは産業革命を経て、いずれをとっても他の国を圧倒し世界をリードする存在だったので世界中の文化を一堂に集めることが出来、圧倒的な工業力を世界に知らしめた。
- ・イギリスが発展させた近代産業が生み出した商品と目新しい技術を展示し、科学技術に支えられた未来を各国と共有し合うため。他国と交流したい。

以上のことから、学生はイギリスの万博開催の目的が国力誇示や貿易の進展、技術交流であったことや、世界で初めて産業革命に成功したイギリスだからこそ、万博を開催出来たことに気付いたことが分かる。

②「1862（文久2）年の世界はどのような世界だと思うか。」

学生の主な意見は次のようであった。

- ・技術が大幅に高まり、大きな機械が次々に作られ始めた。世界中が今までより交流が盛んになった。多くの技術が武器の威力向上につき込まれ武力が巨大化した。
  - ・国ごとの格差が激しく、技術の進歩にも大きく差がつきだした時代。
  - ・産業革命が始まったが、広がりや発展には各国でばらつきがあり、他の国の技術を盗めるものなら盗みたいと言う感じ。
  - ・イギリスが工業化による生産の増大により得た圧倒的な経済力と、軍事力で世界の覇権を握っていた。
  - ・大国が戦争により、植民地を増している中で、お互いの国が緊張感を持っている。産業が機械の発達により急速に発展しようとしている。
  - ・国として成立したり、戦争で負けたり勝ったり、激動のような世界情勢であったと考えられる。そのため、他国がどのような知識や兵器、発明しているのか知りたくてしかたがないような状況であったのではないか。
  - ・世界がイギリスの動きの中で変化していった。多くの国々がこの年に戦争を行い、植民地や奴隷解放など文化の交わりや思想の変化にもまれ、全体的に世界の変わり目のように感じた。今に残る国々の文化の残跡を見てもこの頃の戦争がやはり根強く思える。
  - ・各国との交流が行われていたので、歴史的に見ると比較的平和な世界であったのかなと思った。国どうしの交流で技術力が高まっていた時期なのではないかなと思った。
  - ・博覧会の影響により、各国で今までなかったものが作られ始める。各国で世界の物、人、文化に興味を持ち始める。
  - ・世界交流は進んでいたが、植民地関係や鎖国などすべての国が平等で仲が良いとは言えなかった。万国博覧会に参加していない国も多くあったと思う。
- 以上のことから、学生がイギリスで始まった産業革命が世界に波及し、イギリスが産業、文化の中心となったこと、世界で技術的格差が広がったこと、グローバル化が進行したことを理解したことが分かる。

### ③「万国博覧会が果たした役割は何であったか。」

学生の主な意見は次のようであった。

- ・世界中の国々が交友関係を深め、争い事が少なくなるように支援する。
- ・時代の最先端をいく世界各国の科学技術の粋を一堂に集めて展示するほか、各国の夫々の国ぶりを紹介する展示や催物により国際交流を深めようとする。
- ・今まで行ったことも無く関わりを持っていなかった国について、展示品を見ることで、その国の雰囲気や特徴を肌で感じる事が出来る。そこに来ている様々な人と交流を持つことが出来る。この展示会は人々の刺激になり、より各国の産業技術が向上していく。
- ・他国の技術の発展を目に見えて感じ、自分の国もさらに発展しようとさらに努力を重ねるきっかけになった。近隣国だけでなく、遠く離れた国ともコミュニケーションをとることで、

今まで知らなかったことも、文化の違いなど発見することが出来た。

- 日本の展示品については、日本国内で賛否両論あるものの、イギリスの評価は高いことから、日本に有利に働いたことも少なくなかったのではと考える。日本にも世界の技術が大きな影響を与えている。

以上のことから、万博が直接目で見て比較出来たことや、自国の世界での位置を把握し、更なる科学技術の進歩に貢献したことだけでなく、万博の重要な役割として、「一般人へも他国とのつながりを意識させられた。」のように大衆の異文化交流に気付いた意見もあった。学生は万博が産業技術を見せるだけでなく、莫大な数の人々が集まることによる異文化交流の場であり、庶民レベルでの世界認識の場となっていたことを理解したようである。

#### 5) 授業の感想

万国博覧会という具体的な資料を通して、日本と世界の状況を理解するという授業の目的が学生にどのように伝わったか、学生の主な意見は次のようであった。

- 社会科を暗記だけの教科だと思っていたが、万博からイギリスの産業革命やその時の日本の情勢や文化が分かり、日本と世界と関連させて学べて楽しかった。
- 万博一つ取り上げるだけでも、イギリスの産業革命が背景にあたり、他の国との関係が見えたりして面白と感じた。写真や絵を見せ、生徒に色々考えさせることで授業を行うのは、生徒たちの興味を引き、生徒自ら考えるのには良い方法だと思った。
- 万博の様子を勉強することで、当時の国ごとの技術・文化を知ることが出来た。これにより世界情勢もある程度把握でき、日本が他国からどのように感じられたの分かった。
- 私は世界史が嫌いなので、日本がこの時代世界で何が起きているのか考えたりするのが苦手ですが、万博などの身近な出来事を使って考えるととても分かりやすく感じた。日本史と世界史を融合させて教えていくことは、今のグローバル化にとっても必要かつ重要な事だと思うので、内容を考慮しながら小学生にも教えていけたらなと思った。
- 多くの資料から情報を読み取り、時代背景や国際的な関係が見えてくるのがおもしろいと思った。ロンドン万博での日本の評価を知り、日本は特別大きな展示を出していないにも関わらず、細かい技術が当時から高い評価を受けていて誇らしかった。
- 資料が多く、たくさんの情報を得ながら考えることが出来て良かったです。全部をきっちり読むと時間が無くなるので、自分で情報を取捨選択するようになりました。自分に必要な情報を取捨選択する能力は小学生でも必要です。
- 昔から歴史や社会のしくみを勉強するときとはとにかく暗記だと思っていたので、資料を見ながら自分で考えたり、必要な情報を抜き取るという作業が社会の勉強を楽しくするのだと感じた。

## 7. おわりに

今回の万国博覧会を活用した歴史の授業の意義は次の3点である。①資料から読み取った情報を多面的に考察する力を育成する。②グローバル化する国際社会と相互に関連する世界と日本の歴史を考察する力を育成する。③経済、産業、政治、国際関係を相互に捉える力を育成する。

学生たちは、提供された資料や当時の国際状況を事前に勉強することにより、日本と世界の状況を俯瞰的に見て、1860年代の各国の産業、文化、芸術などを当時の資料や絵を通してより強烈的な印象を持って深く理解を得ることが出来たと思う。

日本が初めて万国博覧会に参加したのは、1867（慶応3）年のパリ万国博覧会で、江戸幕府は和紙、日本刀、磁器、絹織物などの工芸品を展示し、清水卯三郎の経営による柳橋芸者3人が接待する日本風の茶店が大変な人気となった。明治政府が公式参加したのは、1873（明治6）年に開催されたウィーン万国博覧会であり、日本は白木の鳥居、神殿、神楽堂や反り橋のある日本庭園を造り、日本ブームを引き起こした。1893（明治26）年のシカゴ万国博覧会から各国政府が政府館を建設することになり、日本は平等院鳳凰堂を模した政府館を建設した。このように、日本は日本独特の庭園や伝統的建築様式、日本趣味の強いデザインの製品を展示してきた。

日本政府も海外諸国との交易推進、輸出産業の発展を目指して、万博への公式参加を表明して、文明社会である西欧諸国の最新技術を得る一方、日本固有の文化、産業、国民性を世界にアピールする時代に入った。万博は、歴史的状況や当時の国がどのように自国をアピールし、お互いを評価していたのかを理解する重要な資料でもある。

世界の多くの国が集まり、自国の国力を誇示した万博は、その時代に到達した技術、文化を見る装置の一つであった。現在、これまでに開催された万博に関する多くの資料が保存されており、また万博にともなって建造された建築物も目にすることが出来る。学生の多くは歴史を暗記の科目と捉えがちである。万博は、自国と他国の歴史を広い視野から考える力を育成できる優れた具体的教材であると考えられる。

---

<sup>1</sup> 文部科学省「教育課程企画特別部会 論点整理（報告）」2015年8月、13頁。

<sup>2</sup> 文部科学省「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議の論点のポイント（国語、社会科、地歴、公民）」2016年8月、132頁。

<sup>3</sup> 吉見俊哉『博覧会の政治学』中央公論社、1992年、113頁。

<sup>4</sup> *Cassell's Illustrated Family Papers Exhibitor-containing About Three Hundred Illustrations, with Letter-press Descriptions of All the Principal Objects in The International Exhibition of 1862*, Published by Cassell, peter, & Galpin, London, 1862, Volume 5, p.253.

<sup>5</sup> 佐野真由子『オールコックの江戸』中央公論新社、2003年。

- <sup>6</sup> 松村昌家「一八六二年ロンドン万国博覧会会場の幕末使節団（一）」大手前大学人文科学部論集4、2003年、104-120頁。
- <sup>7</sup> 前掲「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議の論点のポイント（国語、社会科、地歴、公民）」、127頁。
- <sup>8</sup> 同上、129頁。
- <sup>9</sup> 同上、132頁。
- <sup>10</sup> 同上、129頁。
- <sup>11</sup> 同上、130頁。
- <sup>12</sup> 大島三緒「どう育てる『歴史総合』複眼で過去に学ぶ授業を」『日本経済新聞』、2016年、9月18日朝刊。
- <sup>13</sup> 松村昌家『ロンドン万国博覧会と水晶宮—ロンドン万国博覧会（1851年）新聞・雑誌記事集成 別冊解説』本の友社、1996年25頁。
- <sup>14</sup> 吉田光邦『万国博覧会』日本放送出版協会、1885年、5頁。
- <sup>15</sup> 国立国会図書館2010-2011 National Diet Library, Japan, All Rights Reserved.  
<http://www.ndi.go.jp/exposition/s1/186.html> 2014年11月11日参照。
- <sup>16</sup> *Cassell's Illustrated Family Papers Exhibitor*, op.cit., p. 7.
- <sup>17</sup> Ibid.
- <sup>18</sup> Ibid.
- <sup>19</sup> *Cassell's Illustrated Family Papers Exhibitor*, op.cit., p. 2.
- <sup>20</sup> “ECHOES OF THE WEEK AND THE INTERNATIONAL EXHIBITION” MAY 10, 1862, *The Illustrated London News* p.482.
- <sup>21</sup> *Cassell's Illustrated Family Papers Exhibitor*, op.cit., p.254.
- <sup>22</sup> 松村昌家『幕末維新使節団のイギリス往還記』柏書房、2008年、72頁。
- <sup>23</sup> *Cassell's Illustrated Family Papers Exhibitor*, op.cit., p. 2.
- <sup>24</sup> 松村昌家『大英帝国博覧会の歴史』ミネルヴァ書房、2014年、186-187頁。
- <sup>25</sup> *Cassell's Illustrated Family Papers Exhibitor*, op.cit., p.117.
- <sup>26</sup> Ibid.
- <sup>27</sup> 熊谷次郎『イギリス帝国と20世紀第1巻 パクス・ブリタニカとイギリス帝国』ミネルヴァ書房、2004年、21頁。
- <sup>28</sup> *The Illustrated Catalogue of the Industrial Department, Foreign divisions, The International Exhibition of 1862, London: Official Illustrated Catalogue & Cassell's Illustrated Family Paper Exhibitor* Masaie Matsumura, Eureka Press, 2014, Volume 4, pp.89-101.
- <sup>29</sup> *Cassell's Illustrated Family Papers Exhibitor*, op.cit., 131.
- <sup>30</sup> Ibid.

- <sup>31</sup> Ibid.
- <sup>32</sup> 筆者「1862年第2回ロンドン万国博覧会における『日本』」『愛知淑徳大学論集—文学部・文学研究科篇—第40号』2015年、68頁。
- <sup>33</sup> *Castell's Illustrated Family Papers Exhibitor*, op.cit.,p.257.
- <sup>34</sup> *The Illustrated Catalogue of the Industrial Department, Foreign divisions, The International Exhibition of 1862, London*, Volume 4, op.cit.,p.121.
- <sup>35</sup> *Castell's Illustrated Family Papers Exhibitor*, op.cit.,p.202.
- <sup>36</sup> Ibid,p.93.
- <sup>37</sup> 松村昌家『1862年国際博覧会（第2回ロンドン万国博覧会）資料総覧 別冊日本語解説』ユーリカ・プレス、2014年、4頁。
- <sup>38</sup> 前掲「一八六二年ロンドン万国博覧会会場の幕末使節団（一）」110頁。
- <sup>39</sup> 前掲「1862年第2回ロンドン万国博覧会と『日本』」59頁。

図1 *Cassell's Illustrated Family Papers Exhibitor-containing About Three Hundred Illustrations, with Letter-press Descriptions of All the Principal Objects in The International Exhibition of 1862*, Published by Cassell, peter, & Galpin, London,1862,Volume 5, p.68.

図2 *The Illustrated London News, September 13,1862*.p.295.

図3 *Cassell's Illustrated Family Papers Exhibitor*, op. cit., p.37.

図4 Ibid, p.253.

図5 *The Illustrated Catalogue of the Industrial Department, Foreign divisions, The International Exhibition of 1862, London : Official Illustrated Catalogue & Cassell's Illustrated Family Paper Exhibitor* Masaie Matsumura, Eureka Press, 2014, Volume 4, p.121.

図6 *Cassell's Illustrated Family Papers Exhibitor*, op.cit.,p.201.

図7 Ibid,pp.92-93.

図8 *The Illustrated London News*, MAY 10,1862. pp.470-471.

図9 *The Illustrated London News*, JUNE 7, 1862. p.591.

図10 *The Illustrated London News*, MAY 24,1862.p.213.

図11 *The Illustrated London News*, Setember 20,1862.p.320.